

## 当社医療検査センターでのパニック値の取扱いについて

◎今村 肇<sup>1)</sup>、渡邊 孝之<sup>1)</sup>、前田 裕二<sup>1)</sup>、江崎 成建<sup>1)</sup>、坂本 准<sup>1)</sup>、守口 浩二<sup>1)</sup>  
株式会社 QCL<sup>1)</sup>

### [はじめに]

当社、株式会社 QCL は、全国的なシェアを占める BML グループの一翼として、九州および山口県に営業拠点 12 か所、ラボ 11 か所を置くことで地域に密着した臨床検査サービス体制を実現している。約 25,000～35,000 依頼/日の臨床検体を受託し、迅速で正確な検査結果を提供している。今回、弊社が受託した検体において当社の基準に基づく緊急報告範囲のデータが検出された場合の当社パニック値の取り扱いについて報告する機会を得たので、現状の医療機関への対応について報告する。

### [現状]

九州山口各地域でお預かりした臨床検体を QCL 福岡ラボへ搬送し、当日の 18:00 より順次測定開始し、翌朝 7:00 までに翌朝報告対象となる検査を実施している。生化学的検査、免疫特殊検査、血液学的検査、微生物学的検査などの対象項目において、検出されたパニック値（100～250 件/日）は 7:30 を目標に各営業所へ FAX し、各医療機関・担当医まで連絡する。

ISO15189 の要求事項に準拠し、最終的に担当医まで伝わったことを確実にするために、次のような報告体制と運用手順を順守している。

システム上で抽出されたパニック値を「パニック報告書」として出力し、専用の FAX 表紙「パニック報告送受信記録書」を用いてパニック値報告の担当責任者を明確にし、2 名体制で読み合わせを行い誤 FAX を防止している。FAX 後には「モニターレポート」にて各営業所別の宛先・枚数・通信状態が良好であることを確認する。また、全ての FAX 完了後には FAX 機の「通信管理レポート」で一連の通信状態が良好であったことを再度一覧表確認する。以上のように、FAX 送受信においては何重にもチェック工程を設け、厳重な個人情報管理をしている。

最終的には、各営業所において FAX 受信後、医療機関への連絡状況を記載した「パニック報告送受信記録書」を QCL 福岡ラボに返信することで、担当医まで確実に伝達されたことを確認している。細菌検査においては、抗酸菌陽性報告、一般細菌は特定検出菌一覧を検出時に各営業所へ FAX を行い各医療機関へ報告する。

また、緊急検査（昼間）のパニック値に関しては、FAX と合わせて直接電話連絡対応する。

さらに、各医療機関からの要望に応じて個別にパニック値範囲を設定し、パニック値として報告する。白血球像においては、異常細胞や芽球等が出現し緊急報告が必要と判断された場合は別紙報告するなど、各医療機関の診療に役立つ情報として提供している。

休日前であっても、緊急検査に関しては医療機関へ直接電話及び FAX 対応をする。年末年始等の長期休日前には、直接担当営業員へ連絡をして必要に応じて「パニック値報告書」を各医療機関へ連絡し報告が遅れない体制をとっている。

### [まとめ]

医療が高度化・複雑化する中で、基準範囲から大きく逸脱し生命を脅かす可能性のあるパニック値に関しては、特別な体制によって検査結果を迅速かつ確実に伝達し、なおかつ多様化する検査のニーズにも柔軟に対応し、民間検査センターとして信頼される高品質な臨床検査サービスを提供している。